

しもきた学講座

斗南藩基礎講座

第7回 藩士の活躍 秋月胤永(悌次郎)

小泉八雲が神様のような人と称した剛毅朴訥な教育者

日時 令和5年10月19日(木) 18:30~
場所 下北文化会館大集会室
講師 地域史研究家 三浦 順一郎



秋月胤永

主催 むつ下北未来創造協議会事務局

斗南藩基礎講座

第7回 藩士の活躍 秋月胤永(悌次郎)

泉八雲が神様のような人と称した剛毅朴訥な教育者

地域史研究家 三浦 順一郎

1. はじめに

政府や薩長関係者は明治維新を輝かしい事績として称賛する。しかし、東北地方にとって明治維新を称賛することができなかった。東北地方を蔑視・卑下した薩長の行為は許すことができなかった。東北地方に対する薩長の偏見は長く続いた。東北地方が明治維新150年ではなく、戊辰戦争150年と称している。これは戊辰戦争を起点として考えるからである。

会津藩はいわれのない朝敵・逆賊の汚名を着せられた。さらに戊辰戦争で略奪、殺戮等の残虐行為等が行われた。薩長の仕打ちに遺恨、怨念を抱いている。

会津若松市と萩市の首長同士や商工会関係者は、友好をはかるための話し合いをもった。しかし、歴史観の違いにより和解にいたらなかった。「仲良くはするが、仲直りはしない」状態がまだ続いている。この確執の解決は、両地区の若者たちが正しく歴史を学ぶ姿勢にゆだねられている。

2. 会津藩士はどんな活躍をしたのか

会津藩士のなかには、不屈の精神と豊かな学識をもとに、政財界、軍人、教育者として活躍した人物がいる。表 1は本県に関わりのある人物を採りあげたものである。

表 1 会津藩士の活躍一覧

職業	人名	役	職	著書・特記事項
(1) 軍人	松平容大 松平保男 山川 浩 出羽重遠 柴 五郎	陸軍大尉(兄) 海軍少将(弟) 陸軍少将 東京高等師範学校校長 東京女子高等師範学校校長 海軍大将(福島県初) 陸軍大将(福島県初)		招魂之碑 秩父宮兩殿下御成記念碑 →『京都守護職始末』・『さくら山集』(歌集)を著す →文化財収蔵庫に書を収蔵 →柴五郎翁顕彰碑が完成
(2) 塾 開設・ 教師 (大学 教授・ 校長)	南摩綱紀 秋月胤永 山川健次郎 沖津 醇 杉原 凱 渡部虎次郎 太田直蔵 荒川勝茂 内藤信節 倉澤平治右 衛門	東京大学・東京高等師範学校教授 熊本第五高等学校教授 東京・九州・京都帝大総長 青森県師範学校校長、青湾学舎開校 元日新館教授、三戸塾を開き教育指導 三戸・五戸の小学校長 大平小学校長 会津で小学校教師 元會津藩家老 五戸に漢学の塾を開設 斗南藩少参事 五戸に中ノ沢塾を開設		→『負笈管見・内国史略』 →『観光集(7巻)・列藩名君 賢臣事実(10巻)』 『會津戊辰戦史』を著す →三戸町の大神宮に墓あり →三戸町の悟真寺に墓あり →後に大湊村助役、村・町長 →『明治日誌』を著す →内藤邸跡 白露庭(会津若松市) 泣血氈 内藤・倉澤の墓は五戸町の高雲寺
(3) 行政職	手代木勝任 北原雅長	左院少議生→香川・高知県の権参事→岡山県川上郡長→岡山区長 秋田県大属→長崎県少書記官→対馬島司		→松平家へ給料の一部を送付。円通寺に義母の墓あり →『七年史』の著者、歌人

(3) 行政職	佐々木泰温 柴太一郎 大庭恭平 関場忠武	→初代長崎市長→東京市下谷区長 斗南藩の職員 三沢の学務委員 父は佐々木禮齋 弟が佐々木只三郎 下北郡長→大沼郡長→南会津郡長 北海道・青森県・若松県・新潟県の官吏 青森県→東京出張所→内務省→農商務省 ⇒ 歴史家	→手代木勝任は兄、旧斗南 藩墳墓の地に、父の墓あり →柴五郎の兄
	小川 涉 池上三郎 池上四郎	田名部支庁長 ⇒ 新聞社社長 兄 函館控訴院検事長 弟 第6代大阪市長	→『浮世絵編年史』・『會津松 平家譜』の著者 →『會津藩教育考』の著者 →父武輔と三戸八幡村に移 住、四郎は秋篠宮妃殿下紀 子の高祖父 →『遊浴日記』を著す →会津藩士の書画収集 →『太田日誌』
	津田永佐久 二瓶勝介 太田直蔵 遠藤 輔 木村重功	初代川内村長 21年 東通村助役・村長 31年 大湊村・町長 32年 初代脇野沢村長 4年 佐井村長 1年	→末裔が大間町に会津斗南 藩資料館を開館
	武田寅之助 山内啓介	風間浦村長 4年 川内町長 8年	
(4) 医師、 技師	小池 毅 橋爪 陽 関場不二彦	北里柴三郎の伝染病研究所でペスト菌の 研究をする。 広島県醸造試験場西条清酒醸造支場長 広島県の酒の三恩人、父は橋爪寅之介 東京大学医学部卒業、北辰病院長、北海 道の医学発展に貢献	→『百思土病研究』を著す 父は会津藩の医師 →徳玄寺に祖父母・父母・本 人・弟の墓あり →『西医学東漸史話』父は 歴史家の関場忠武
(5) 牧畜業	広沢安任 小池 漸	斗南藩少参事、弘前県との合県に尽力す る。洋式の広沢牧場を開場 大室牧場	→『開牧五年紀事・近世盲者 鑑・奥隅馬誌』を著す →『陸奥半嶋道志留遍』
(6) 負の活 躍、蜂 起・反 逆	永岡久茂 竹村俊秀 中原成業 井口慎次郎 中根米七	田名部支庁長辞職→東京で新聞発行 青森県開墾頭取→東京へ出る。祖母の墓 が旧斗南藩墳墓の地にある。 竹村・中原・井口の墓は東京都新宿区の源 慶寺にある。	→5人は思案橋事件の主謀 者。永岡は乱闘で誤って切 られ、獄死した。竹村・中 原・井口は斬罪された。中 根は逃亡し、会津の喜多方 で自決した。

2. 秋月胤永(倅次郎)(1824~1900)の活躍

秋月胤永は漢学者であり、詩人・教育者でもあった。丸山四郎右衛門胤道の次男として会津若松に生れた。後に秋月に改姓した。日新館の秀才として知られ、江戸の昌平黌しょうへいこうに留学した。その書生寮の舎長(寮生を指導・監督する責任者)となり、幕府から扶持を給された。

幕末の京都で会津藩の公用人として、各藩との交渉にあたる。会津藩は薩摩藩と謀って、長州藩と尊攘派公家を京都から追放した(八月十八日の政変)。その後胤永は保守派に活躍を妬まれ、蝦夷地の舍利(斜里)の代官に左遷される。しかし、屈強な精神力で酷寒の地で生き続けた。

後に許され、京都に戻る。すでに薩長同盟の密約がなされ、時局は倒幕へと動いていた。会津藩外交の挽回は不可能であった。

戊辰戦争後に、明治新政府は胤永を戦争責任者として盥回しの幽閉生活にした。青森県の野辺

地にも送られたことがあった。晩年に熊本の第五高等中学校(後に第五高等学校)の教師となった。

(1)漢詩からみる秋月胤永

①「九月入蝦」 * 書がむつ市にある

②「余以文久二年。参京都守護政務。慶應元年移令于蝦夷舍利。病中所得」

→ 左遷された酷寒の地で強く生き抜く(不撓不屈)

③慶応二年十二月、京都より秘書をもて予を徴す。舎麻尼めしやまにに至れば則ち歳已すなわとしすでに尽く。丁卯春日、久寿里途中くすりの作

④「有故潜行北越帰途所得」 → 藩主の無実を訴える(忠君) * 書が3幅むつ市にある

⑤十和田市の澄月寺の「招戦没諸士之魂碑」の碑陰記を揮毫

(2)教師としての秋月胤永

①剛毅朴訥 学徳兼備 漢学と倫理を教授

②人望のある教師 古稀の祝宴に職員・生徒等を含めて500人以上の参加者があった。

(3)同僚の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が見た秋月胤永

八雲は、小説家、英文学者である。日本の文化を外国に紹介した。『怪談』(「耳なし芳一のはなし」・「雪おんな」・「むじな」)、『日本雑記』(「果心居士のはなし」・「守られた約束」)、『知られぬ日本の面影』、『霊の日本にて』等がある。八雲は第五高等中学校で秋月胤永と同僚であった。彼を「神様のような人」、「そばいと暖炉のようで暖かくなる人」と称した。

(4)小説家と評論家が見た秋月胤永

①司馬遼太郎が見た秋月胤永

司馬遼太郎は歴史上の多くの偉人、有名人を小説にした。秋月については、「小説に書けるような個性や特異な思想をもっていた人物ではない。保守的教養や倫理のわくのなかで謹直に暮らし、やがて老いた」と述べ、小説にしなかった(「ある会津人のこと」1974年、『余話として』に所収)。これは歴史・人物の捉え方の違いである。

②直木賞作家中村彰彦の秋月胤永

中村彰彦は、長編歴史小説『落花は枝に還らずとも 上下』(中央公論社 2004年)に秋月胤永の活躍を書いた。上下2巻670頁におよぶ大著である。漢詩を適切に活用した迫力のある小説である。

③松本健一『秋月悌次郎 老日本の面影』(作品社 1987年)

秋月胤永の活躍を思想面から追及した重厚な評伝である。

④徳田 武『会津藩儒将 秋月韋軒伝』(勉誠出版 2012年)

従来使用されなかった漢詩・漢文の資料を縦横に駆使して、秋月胤永の活躍を細部にわたって論考した評伝である。

(5)記念誌の秋月胤永

①秋月悌次郎詩碑建立委員会編集『秋月悌次郎詩碑建立記念誌』(1990年)

漢詩をふまえて胤永の活躍を説明している。詳しい年譜が参考になる。

*平成2年(1990)に会津若松市の鶴ヶ城三の丸に秋月悌次郎詩碑が建立された。

また同25年(2013)に会津坂下の東松峠にも秋月悌次郎詩碑が建立された。

3. 活躍の要因と任務

(1)日新館教育の影響

書を書き、漢詩・歌をつくるのが武士に求められた。会津藩士は漢学の高い教養を保持していた。これは日新館の教育が影響している。日新館では朱子学を中心にして、四書五経や歴史書の素読が行われ、進級は試験でなされた。試験科目に漢詩の作成も課せられていた。日新館で優秀な成績を収めた藩士を幕府の学問所の昌平黌に留学させた。それは小笠原午橋、秋月胤永、広沢安任、南摩綱紀、大庭恭平、安部井塔巖、小川渉である。秋月胤永と広沢安任は昌平黌の舎長(級長)を勤

めた。

(2)著書の出版

松平容保と会津藩は朝敵・逆賊の汚名を着せられた。その汚名をそそぐことが会津藩士の務めであった。そのために著書を出版した藩士がいた。著書に容保が孝明天皇から信頼されていた証拠となる史料を提示した。明治新政府は都合が悪いとして、著者を不敬罪で拘留した。

また詩文にたけた藩士は各分野で著書を出版した。

- ①北原雅長『七年史』
- ②山川 浩『京都守護職始末』
- ③山川健次郎『會津戊辰戦史』
- ④平石辨蔵『會津戊辰戦争 白虎隊娘子軍高齢者之健闘』

4. おわりに

秋月胤永は漢学者であった。学問が出来た。江戸の昌平黌で学問を通じて他藩士と交流し、知己を得た。それは明治になっても役立った。高い学識のある胤永を政府は見過ごしておかなかった。役人に採用した。後に熊本中学校の教師にも採用した。胤永は若い世代を育てる教育愛があった。官を退いても塾を開き、後進の指導にあたった。その根底に日新館教育があった。

斗南藩首脳部は斗南日新館を建て、次世代を担う子弟の教育指導にあたった。入門者は藩士のみならず町人も許可した。また藩士の中には塾を開いて教育した者もいた。

青森県・下北地方に残った藩士は、教育面・行政面で業績を残した。学制発布後に多くの會津藩士が小学教師・校長となり、教育指導を行った。末裔も教育者となった。

また町村の首長になった。20年・30年以上も首長を務めたのは行政手腕があり、人望があったからである。

参考文献(深く追求する人のために)

◆評論

- 山川 浩 『京都守護職始末』
- 小川 涉 『會津藩教育考』
- 荒川勝茂 『明治日誌』(新人物往来社)
- 柴 五郎 「会津戦争後談」
- 秋月一江 『秋月悌次郎伝』
- 松本健一 『秋月悌次郎 老日本の面影』(辺境社)
- 徳田 武 『会津藩儒将 秋月韋軒伝』(勉誠出版)
- 星 亮一 『斗南藩』(中央公論社)
- 松田修一 『斗南藩』(東奥日報社)
- 秋月悌次郎詩碑建立委員会 『秋月悌次郎詩碑建立記念誌』
- 秋月悌次郎顕彰会 『信念を貫き通した会津藩士 秋月悌次郎』
- 木下 彪 『明治詩話』(岩波文庫)

◆小説

- 永岡慶之助 『斗南藩子弟記』(文藝春秋社)
- 早乙女 貢 『会津士魂』・『続会津士魂』(新人物往来社、集英社文庫)
- 綱淵謙錠 『戊辰落日』(文藝春秋社) 『苔』(中央公論社)
- 中村彰彦 『二つの山河』(講談社) 『落花は枝に還らずとも 上下』(中央公論社)

資料編 漢詩と漢文

①九月入蝦(七言絶句)

漁獵為生不識秋、
漁獵生を為して秋を識らず、

この蝦夷地は漁獵で生計をたてている。時代の認識はない。

蜻蛉洲外一蜻洲

蜻蛉洲の外に一つの蜻洲、

しかし、ここは日本の一部である。

回頭鄉里豈言遠

頭を回らせば、郷里豈に遠しと言わん、

郷里の会津をそんなに遠い所と思わない。

隔海青山即奥州

海を隔てて青山即ち奥州

海を隔てれば青い山があり、そこは会津のある奥州である。

②慶応元年移令蝦夷舍利。慶応元年令蝦夷舍利移。病中所得(七言絶句)

京洛斯時合獻謀

京洛斯の時に合い、謀ごとを献ず

京都にいた時に容保公に政策を提言した。*きょうらく

謫居臥病北蝦州

謫居に臥す北蝦州

今は北の蝦夷地に流されて病に臥している。

死埋枯骨還非惡

死して枯骨を埋むるも、還悪くからざらん

この地に骨を埋めるのも悪くはない。

唐太以南皆帝州

唐太以南、皆帝州

樺太から南は皆天子さまの地なのだから。

③慶応二年十二月、京都より秘書をもて予を徵す。舍麻尼に至れば則ち歳已に尽く。丁卯春日、久寿里途中の作(七言絶句)

互寒墜指雪為層

互寒指を墜し雪層を為す

雪が層をなして積り、凍るような寒さで指が落ちそうだ。

聞説吏人過未曾

聞説吏人過ぐること未だ曾であらずと

役人がこの道を通った事は、まだ無いという。

苦絶斯行亦奇絶

くぜつ くのこ ころまた きてつ
苦絶せる斯の行亦た奇絶

この旅行は甚だ苦しいものだが、また甚だ珍奇なものだ。

春風跨馬涉堅氷

しゅんぷう またが けんびょう わた
春風馬に跨りて堅氷を渉る

吹き始めた春風に馬に跨り、堅い氷の上を渡って行く。

*舎麻尼(様似)

くすり
久寿里(釧路)

④有故潜行北越帰途所得(七言排律)

行無輿兮帰無家

行くに輿無く、帰るに家無し、

出て行くに乗り物はなく、帰るにも家がない。

国破孤城乱雀鴉

こじょうじやくあみだ
国破れて、孤城雀鴉乱る、

会津は戦いに破れ、孤立した鶴ヶ城は雀鴉が乱れて騒いでいる。

治不奏功戦無略

ちこう
治功を奏せず、戦い略無し、

政治には功なく、戦争にも秀でた戦略もない。

微臣有罪復何嗟

びしん
微臣罪有り、復た何を嗟かん、

罪は吾等家臣にあつて、今更嘆いてもどうにもならない。

聞説天王元聖明

きくならく てんのうもと
聞説、天王元より聖明、

聞くとところによれば、天皇は聡明な方であられるから、

我公貫日發至誠

かんじつ しせい
我が公の貫日、至誠に発す

我が松平容保の企てた事業は、天皇への至誠から発したことにあるから

恩賜赦書應非遠

おんし しやしよ まま
恩賜の赦書、応に遠きに非ざる、

恩赦が下されるのもそんなに遠くない。

幾度額手望京城

いくど ひたい
幾度か額に手して、京城を望む、

何度も額に手にして京都の方を望んでいる。

思之思之夕達晨

これ これ
之を思ひ之を思うて、夕べ晨に達す、

あれこれ思うと夜通し眠れず、

愁滿胸臆淚沾巾

うれいきょうおく
愁胸臆に満ち、涙巾を沾す

心配で胸一杯になり、涙が襟に満ちてくる。

風漸瀝兮雲慘愴

風漸瀝として、雲慘愴たり、

風は寂しく、雲も薄暗い。

何時置君又置親

何れの時に君を置き、又親を置かん、

何処へどうしたら君と親とを安らかにおくことが出来るのだろうか。

此戊辰年開城後有故

此れ戊辰の年開城後故有りて、

潜行北越帰途所得

北越に潜行し、帰途得る所、

今而思之恍如隔世

今にして之を思う恍隔世の如し

十六年三伏

十六年三伏

為野村君録

野村君の為に録す、

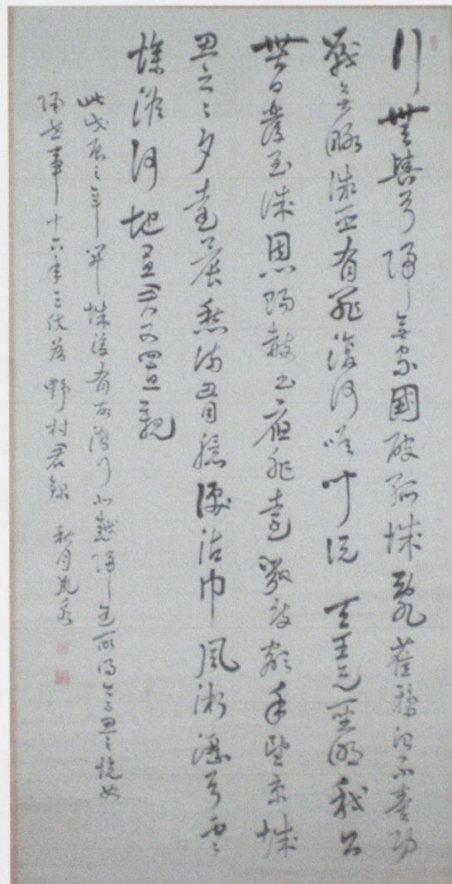
秋月胤永印

*恍隔世の如し(あたかも時代を遠く隔てたようである)
*十六年(明治十六年) *三伏(酷暑の頃)

⑤ 招戦没諸士之魂碑

十和田市(元は陸奥国上北郡三本木村)の澄月寺に、「招戦没諸士之魂碑」と題する招魂碑がある。会津藩士の霊を慰めるために、

明治二十三年(一八九〇)七月に建立された。題は山川浩、碑陰記の撰文は秋月胤永、書は門人の佐藤劉二である。秋月胤永は詩人で名作家として知られ、多くの碑文を依頼された人である。



我會津藩戊辰之役。開端于伏見鳥羽。尋戰于下野越後及白河等各地。
 終嬰孤城而拒戰連旬。前後戰歿者殆三千人。父為獨。子為孤。其慘
 狀不可言。蓋亦盡忠其主已。先是藩主松平容保公為京都守護職也。
 孝明天皇賜近衛忠熙書曰。會藩勇威朕賴之。將有藉其力。亂平後。
 長門奧平謙輔贈書曰。貴國有大造于海內。不獨為幕府致節。弊
 邑亦受其賜矣。土佐岩崎惟慊亦曰。京畿以東。兵力之強。誰出貴藩
 之右者。其為先帝所依賴。諸藩所稱揚如此者。蓋戰歿諸士與有
 力矣。及世子容大公再封斗南。諸臣多從焉。今茲庚寅值二十三回
 忌辰。胥謀建碑于上北郡三本木村澄月寺以祭焉。舊藩老山川
 浩為題其面。胤永記其陰。嗚呼諸士玉碎。而其名與此石不朽。余輩
 瓦全。至今不能成一事。媿於諸士多矣。明治二十三年七月。正七
 位秋月胤永撰。門人佐藤劉式書。



十和田市澄月寺の「招戦没諸士之魂碑」

(読み下し文)

わがあいづはん ぼしん えき 伏見鳥羽に端を開き、尋いで下野越後及び白河等各地に戦い。終に孤城に墮りて連旬戦いを拒ぐ。我会津藩は戊辰の役に、前後戦歿者殆ど三千人。父は獨りと為り、子は孤と為る、其の惨状言うべからず。蓋亦其の主に忠を盡せしのみ。先に是の藩主松平容保公は京都守護職と為るなり。孝明天皇は近衛忠熙に書を賜つて曰く、会藩は勇威にて朕は之に頼る。將に其の力を藉り有らんとす。乱平らぎて後、長門の奥平謙輔書を贈つて曰く、貴國は大いに海内に造す有り、独り幕府の節を致すのみならず、幣邑も亦其の賜を受くるなり。土佐の岩崎惟慊も亦曰く、京畿より以東に、兵力の強いのは、誰か貴藩の右に出づる者ぞ。其の為に先帝の依頼する所と為る。諸藩の称揚する所此の如き者は、蓋戦歿諸士の與りて力有るなり。世子容大公が斗南に再封されるに及び、諸臣多く焉に従う。今茲に庚寅廿三回忌辰に値り、胥謀り、碑を上北郡三本木村澄月寺に建て以て焉を祭る。旧藩老山川浩為に其の面に題し、胤永が其の陰に記す。嗚呼諸士の玉碎、而して名は此石と與に朽ちず。余輩は瓦全たり。今に至つて一事も成す能わず。諸士に媿ずること多し。

明治二十三年七月 正七位秋月胤永撰。門人佐藤劉二書。

